

よそ行きのおうですっぴんの町 大阪・堀江

社会学科一回生 奥野

1. 背景・問題意識

ここ数年の間に、大阪の新しいショッピングエリアとして、南船場や堀江というまちが若者に注目されている。私もブラブラと買い物をしによく行くが、その2つのまちには共通した独特の雰囲気があると思う。立ち並ぶ服屋とカフェ、まちを歩く人々。さまざまな要素が重なって完成され、周りとは明らかに確立されどこか異空間的に一つの“まち”のように存在しているように私は感じる。何年か前、母が「堀江なんか家具屋街やったのにな...」と言っていたのを思い出し、このエリアが注目されるようになったのは本当にごく最近のことなんだなあと思った。今回は私がよく行く堀江に注目し、この新しいまちの魅力とは何なのか、このようなまちが形成されるまでの歴史もあわせて分析したい。

2. 調査の目的・概要

調査目的

堀江というまちがどのように形成され、注目されるようになったのか、まち独特の雰囲気を作り出し、人々をひきつける魅力とは何なのかを明らかにする。

調査対象

大阪市内・堀江エリアのまち（たちばな通りのあたりを中心とする）

調査方法

- ・ 調査時期 2004年10月13日
- ・ 調査方法 観察法
- ・ 調査手順 まちの歴史を調べる。まちの様子を観察を行い、考察する。
- ・ 記録方法 写真、メモにより記録する

(使用している写真はすべて2004年10月13日撮影)

調査項目

歴史（地図、店の種類・分布、現在に至るまでの変遷）

店（種類・分布、外観、商品、価格、客層）

人（年齢層、服装、何人でどのような関係の人と・あるいは1人で、）

3 . 調査結果

堀江の歴史

最初に述べたように、母が言った「堀江なんか家具屋街やったのにな...」という言葉が気になり、私はまず堀江の歴史について調べてみることにした。

水都大阪と言われるだけあって、昔から大阪は河川や水路が発達し、輸送には道路より水路が利用されていた。もちろんかの有名な道頓堀川も輸送の大きな役割を担っていた。

川周辺には輸送に便利だということで、木材屋や家具店が自然に増えていった。そして、1960年代の高度経済成長期、家を建てる人が増え、家具を買う人のラッシュが続いた。売上は大きく伸び、堀江は全国有数の家具店街として栄えていった。そんな堀江に危機が訪れたのは1980年代だった。時の流れとともに郊外型の大型家具店などが増え始め、これまでの値引き売りに力を入れていた家具店は、私たち「買い手」の価値基準の変化に気付かなかつたのだ。家具をライフスタイルの一部としてとらえ、ファッション性や便利さを



道頓堀

を求めている消費者のニーズが見えていなかった。時の流れに乗り遅れた堀江は、日に日に売上を落とし、店をたたむケースも出てきたという。街壊滅の危機さえ感じ始めた商店街の人たちは1992年に『立花通活性化委員会』を発足。その年の冬に立花通りの愛称を新聞で公募。1,000通を超える応募の中から『Orange Street』という名前が決まった。それから委員会は、国内外の活気ある商店街や家具店街を視察してまわった。そこで行われて



Orange Street

いた“アンティークのフリーマーケット”からヒントを得、Orange Streetでもイベントを開催できないかと考えた。アメリカ村からも近いということで、若者をターゲットにしたフリーマーケットを提案した。当時、Orange Streetに点在していた駐車場を活用し、試験的に行われた第一回のフリーマーケットでは、2,000人を集め、大成功だった。その後、第二日曜日に定期的に行われる堀江の名物イベントとなった。フリーマーケットが恒例化し、Orange Streetへの客足は確実に増えてきたが、家具が飛ぶように売れ始めたわけ

ではなかった。そこで1994年から、フリーマーケットと並行して“総額100万円の家具をプレゼント”というふれ込みでベストカップルコンテストを行い始めた。もともと立花通りは婚礼家具を多く扱っていたこともあり、その年に結婚を予定しているカップルの写真を募集したフォトコンテストを開催した。若者に向けて「家具の街」をさらにアピールしていった。次々と活性化の効果が見え始める中、1996年にOrange Street家具フェスタを開催した。これまでのような業者向けのフェスタではなく、あくまで一般の消費者たちが自由に楽しめるようにと企画された。このような委員会の努力が実り、1998年、大阪での火

付け役たちが次々とショップをオープンさせた。その後、東京系のテナントが続々と堀江に進出し始めた。ショップ進出のラッシュは2000年後半から2001年前半で、多いときには1ヶ月に10軒以上のペースで新店舗が登場していた。現在でも、土地を争うようにショップやカフェが次々とオープンし、関西でも最も活気のある街へと変革を遂げた。最近では若者の街として完全にそのイメージを定着させ、かつての家具店も時代のニーズに合ったインテリアショップとして、街と一体になったのだ。家具店街のイメージこそ薄れたものの、Orange Streetの家具店店主らの地道な努力があったからこそ、今日の堀江が誕生したといってもいいだろう。



(新しい家具屋)



(立花通り入り口ゲート)



(緑いっぱいのオープンカフェ)

現在の堀江

普段フラフラと買い物をしている通りを一人でじっくりと観察しながら歩いてみると、このまちに存在するいくつかの特徴を見出すことができた。それらを写真とともに紹介していこうと思う。

** カフェと服屋の融合 **

堀江といえばカフェ激戦区として有名である。アジアン、パスタ、デザートなど様々なこだわりメニューでそれぞれの店の個性を持っている。驚いたことに服のショップの一角にカフェスペースを設けている店が数軒あった。服とカフェの融合。まさに堀江濃縮という感じだった。



服屋 カフェ



カフェ 服屋

＊ ＊新・旧の混在＊ ＊

新



(外観もおしゃれな新しい店)

旧



(昔ながらの家具店)

ぱっと見た感じでは家具屋とわからないようなおしゃれな新しいショップが増え、昔のような家具屋街のイメージは薄れたものの、今もなお変わらないたたずまいの昔ながらの店もポツリポツリとあった。



旧

新



旧

新

新旧の混在する堀江では、このような風景も何度か見られた。新しくできた服屋と古い店や建物が隣り合わせに建っている。このまちが歴史の流れの中にあることを感じられる。

＊ ＊ 外観の種類 ＊ ＊

立ち並ぶ店の外観を見ていると大きく2つのタイプに分けられることに気づいた。

1. ガラス張り・照明・暖かい



(店の周り一面ガラスの家具屋)



(奥に細長い服屋)



(暖色の照明がかわいい服屋)

ガラス張りで店内の様子がよく見え、照明やディスプレイにこだわっている。床もフローリングでどこか家のような雰囲気を持つ親しみやすくあたたかい空間を感じる。

2. 近代的・直線・コンクリート



(湊町のレストラン)



(真っ赤な外壁が目を引く服屋)



(入り口拡大図)



(芝生とコンクリートがおもしろい入り口)



(コンクリートそのままの外壁)

とても近代的な建築で、一見何の店かわからない。コンクリートなど素材そのままむき出しの斬新な雰囲気、外観が目を引きが中には入りづらく感じる。

＊ ＊ 裏の通り ＊ ＊

おしゃれなショップが立ち並び、若者でにぎわう通りをほんの少しはずれると堀江はまったく違う表情を見せた。都会のど真ん中にもかかわらず緑の生い茂る普通の公園があり、たくさんのちびっこが楽しそうに遊んでいた。



(公園で遊ぶ子供)



(マンションやビル)

堀江の中にもマンションや民家が存在する。しかしこのあたりは店のある通りとは違い、人通りも少なくとても静かだった。外観にこだわったショップとは対照的に、灰色のビル群という感じだった。

おしゃれできれいな町並みの通りを少しはずれると、怪しげなネオンがキラキラ輝く夜の都会が現れた。さっきまで立ち並んでいたカフェが本当にうその様だった。



(夜の街並み)

4 . 分析

このまちの特徴として、カフェと服屋の融合、新旧の混在、2種類に分かれる外観裏の通り、の4つに気付いて思ったのが、おしゃれのまち堀江は実は非常に合理的な、荒っばいまちなのではないかということだ。特に、通りの中に数軒あったカフェ+服屋の最強コンビは、どっちもいいからどっちもやったらええねん的な関西っばさを感じた。夏休みには、そこでお茶を楽しむ若者とともに、買い物に付き合わされているのであろうお父さんや子どもの姿も見たことを思い出した。時代は流れていけどもナニワの商売人の魂はまだまだ息づいているようだった。それを表すかのように、新しくきれいなショップと並んで年季の入ったたずまいでひっそりと存在し続ける昔のままの店があった。そして一步横の通りに出るとがらりとまちの表情が変わる。このどこか矛盾するような、完璧にはよそ行きでないところが、このまちが人々をひきつける魅力のひとつなのではないだろうか。確かに、近くにあるアメ村とはきれいさも、客層も、並んでいるショップも全く違う。静かで人も少なくゆったりと買い物を楽しむことができる。しかしたくさんの方の努力の歴史の中でできあがった新しいまち堀江は、これからのさらなる変化と、合理性、意外性で私たちを楽しませてくれるだろう。

5 . 反省点

今回、いつも何気なくフラフラしていたまちをタウンウォッチングをしてみて、改めて自分が普段どれだけ何気なく歩いていたかわかった。しかし、歴史などにふれてみると案外ドラマチックで、とてもわくわくした。きっとこれから少し違った視点を持って、堀江も、他のまちもフラフラできると思う。

調査自体の反省としては、やはり準備不足であったことと、時間不足だったと思う。放課後とにかまちへ行って、気になるものを写真で撮ってきたという感じだった。もう少し、どんなものを見るか絞っていたら、もうすこしまとまりあるものにできたと思う。それと、商店街の人に質問をして、直接話を聞けたらおもしろかったなあと考えた。

足りないところや、後になってもっとこうすればよかったと思った点はいくつもあったが、自分でなにか探してくるといってもいい経験になったし、なにかひらめいて気付けたときはとても得した気分になった。おしゃれのまちで携帯片手に1人でうろうろするのは非常に恥ずかしかったが、とてもおもしろかった。

参考ホームページ <http://www.horieweb.com>